外国語のクラスで異文化・対人コミュニケーションを教えることの重要性

アビゲル・キャラハンとカリーナ・コーゲダル

カリフォルニア州立大学モントレーベイ校

要旨

人の態度や行動、考え方は育った国の文化や慣習に影響される。外国語教育では自分の国とは全く違う国の文化や言語を学ぶため、さらに幅広い見解を養うことができるうえ、異文化でも柔軟なコミュニケーション能力を養うことができる。この研究では「外国語教育はどのように実生活で使える言語能力取得に貢献しているか」、「外国語の授業ではなく、留学することにより習得できる異文化理解にはどのようなものがあるか」、そして「どのようける化的偏見が適切なコミュニケーションに影響を与えるか」の三点について調査を行った。質問対象は、日本とアメリカの大学生でアンケート調査により結果をまとめた。日本の学生もアメリカの学生も留学した国で正しいマナー、やってはいけない事を学ぶということ。またそれは授業以外の場で学ぶことの方が多いこともわかった。その他にほとんどの日本人もアメリカ人も留学先の授業で異文化コミュニケーションへ対応できる能力をうけることができたと感じていることも明らかになった。Hofstede（1991）は日本とアメリカではそれぞれの文化的偏見を持っているとしているが、この研究ではその違いの差は見当たらなかった。

はじめに

私たちの研究は外国語のクラスで異文化コミュニケーションと対人コミュニケーションを教えることの重要性である。外国語教育では自分の国とは全く違う国の文化や言語を学ぶため、さらに幅広い見解を得ることができるうえに、異文化でも柔軟にコミュニケーションできる能力を身につけることができる。その研究では、人の態度や行動、考え方は育った国の文化や慣習に影響されることを異文化コミュニケーションと対人コミュニケーションを通して追求していく。さらに、母国の外国語のクラスと留学先国の外国語のクラスの二つの環境について調査し分析する。

1. 研究の重要性

私たちがこの研究をした理由は、世界のグローバリゼーション と多様性がある現代の文化を理解するために、異文化コミュニケーションの知識は大切で、外国語のクラスや留学中の経験が異文化コミュニケーションを円滑にするのかについて探っていきたいと思ったからである。それにコーゲダルが日本の立命館大学に留学をした時に、異文化コミュニケーションと心理学のクラス を受講し、 異文化コミュニケーションについて学びとてもこのトピックに興味があったからである。また、キャラハンは日本語を勉強する前に、演劇やスピーチコミュニケーション のクラスを勉強し、人がどのようにコミュニケーションをとるのかについて興味を持っていたことにも関係がある。

2. 研究質問

1. 外国語教育はどのように実生活で使える言語能力取得に貢献しているか。
2. 外国語授業の中では習得できず、留学により習得できる異文化理解にはどのようなものがあるか。
3. どのような文化的偏見が適切なコミュニケーションに影響を与えるのか。

3. 研究背景

3.1 対人コミュニケーションの定義と異文化コミュニケーション

対人コミュニケーションの定義だが、SkillsYouNeed によると人々が言語的又は非言語的なメッセージを使う時に、感情や意味、情報を交換することである (2015)。異文化コミュニケーションにおいて何が適切か不適切であるかを判断するためには、違う文化によるコミュニケーションのスタイルを

理解することが重要である (Ramsey, 1979)。さらに、日本とアメリカでは対人コミュニケーションの仕方が違う。日本では人との調和を大切にする上、人間関係やグループの中の一員となることを大事にする一方、アメリカではコミュニケーションは実用的でありグループより個人を強調する傾向にある。

3.2 異文化間で起こる対立の例：相槌と異文化の定義

異文化間でおこる違いの一つとして相槌がある。相槌とは会話をしている最中にしばしば挿入される間投詞のことで、日本では「はい」・「うん」・「ああ」等、聞き手が話す相手に聞いているということをあらわす言葉である。例えば、アメリカでは日本とは違いあまり相槌をうつと相手の会話に興味がなく、早く終わってほしいというしぐさになり、失礼な態度となる (Hanzawa, 2012)。次に異文化の定義を紹介する。「異文化とは生活様式や社会習慣、ものの考え方などの異なる文化」のことである。さらに、母国の外国語のクラスと滞在国の外国語のクラスの二つの環境について調査した。

3.3 外国語の教育法とカリキュラム、外国語のクラスに関する問題

アメリカの日本と外国語に関する教育法とカリキュラムの違いは、まずアメリカでは外国語を必須科目にするか否かは州のよって異なるが、日本は文部科学省の管轄により 2008 年から小学校で英語を学ぶことが義務付けられている (Kashihara, 2011; U.S. Department of Education, 2010)また、教育方法のうちに 5 つの c からなるスタンダードというものがあり、コミュニケーション・文化・コネクション・比較・地域社会に基づいた教育方針である一方で、日本では読み方、書き方、話し方、会話の意図を理解することに重点がおかれている。ことからも外国語教育違におけるいがわかる (The 5 Cs : Standards., 2015; Kashihara, 2011)。次に、外国語のクラスにあいては日本でもアメリカでも、会話を勉強するが、表現のを暗記するだけで終わり実際に会話ができる能力が身についていない現状がある。また、日本ではネイティブ・スピーカーがいないことがこの問題の

大きな要因だと考えている。一方のアメリカでは５Ｃのスタンダードを基に本来の意味でのコミュニケーションに力をいれているが、学生にとって話す時の不安感はまだ高いようだ。

3.4 コミュニケーション能力と留学

では留学はどのようにコミュニケーション能力に影響するのだろうか。Schnickel は留学経験は、学生が異文化間のコミュニケーションの習得に役立つ上、学生は異文化に対しより広い認識を持つことができると述べている(2010)。Dwyer は留学した学生にアンケート調査を行い、留学が自信。成長に役立つと答えた人が 96.5%、異文化に関する知識や偏見に対して認識できるようになったと答えた学生は 96%であった (1999)。

3.5 異文化コミュニケーションに対しする他の影響

1991 年の Hofstede の研究では文化的な価値志向がお互いのやり取りを理解し、適切なコミュニケーションをする際、大事になるレンズを作り出す方法であり、文化的な価値志向が異文化コミュニケーションに影響すると述べている。では留学することによりどのようにこの文化的偏見が減るのだろうか。ホフテッドの調査によると、このチャートに示されているようにアメリカ文化の価値と日本文化の価値は違う。例えば、アメリカ文化では個人の顔をたてることや、リスクを 追うことが大切で個性を重んじた文化である一方、日本文化は縦社会を重んじ、個人よりグループでの 顔を立てることを大事にし、できるだけ対立しないようにする集団主義的な文化である。

4. 結果

4.1 研究方法と参加者について

参加者は合計５９名の大学生で、そのうちアメリカ人が２８名、日本人が３１名だった。アンケート調査はオンラインで行った。この調査への参加者はアメリカ又は日本に留学したことがある大学生と、英語又は日本語を外国語として勉強したことがある大学生である。このうちアメリカ人の大半は 四年生で日本人の大半は二年生であった。参加者の内、日本人の８０％が７年以上外国語を勉強した経験があることに対して、アメリカ人は３年から４年と答えた学生が４０％であった。留学した国については、アメリカ人の大半は日本へ、日本人の大半はアメリカへ留学していた。留学した期間では、アメリカ人の５０％が一年間留学した経験があると答えたのに対し、日本人の４８％は現在留学していると答えた。

5. 研究結果の発表

5.1 研究質問一の結果

研究質問一は「大学生の目標言語の文化に対する意識に外国語 教育はどのように影響するのか」である。

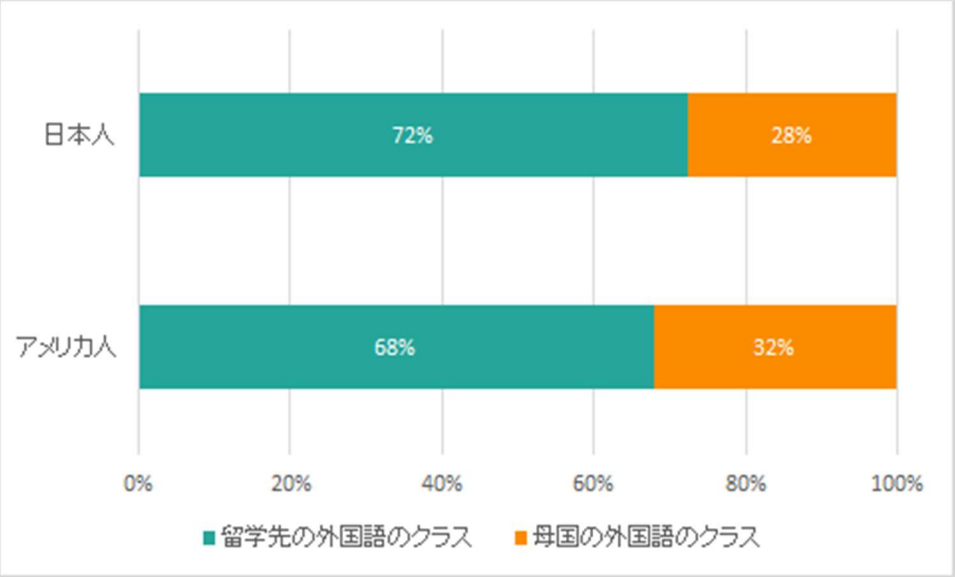


図１：どちらのクラスの方がその国の人と交流する時に自信を持ってコミュニケーションをとることができるか

図１からわかるように、どちらのクラスの方がその国の人と交流する時に自信を持ってコミュニケーションをとることがでるかという質問に対し、日本人もアメリカ人も大半の学生が、留学先での授業で異文化コミュニケーションへの自信がついたと答えた。

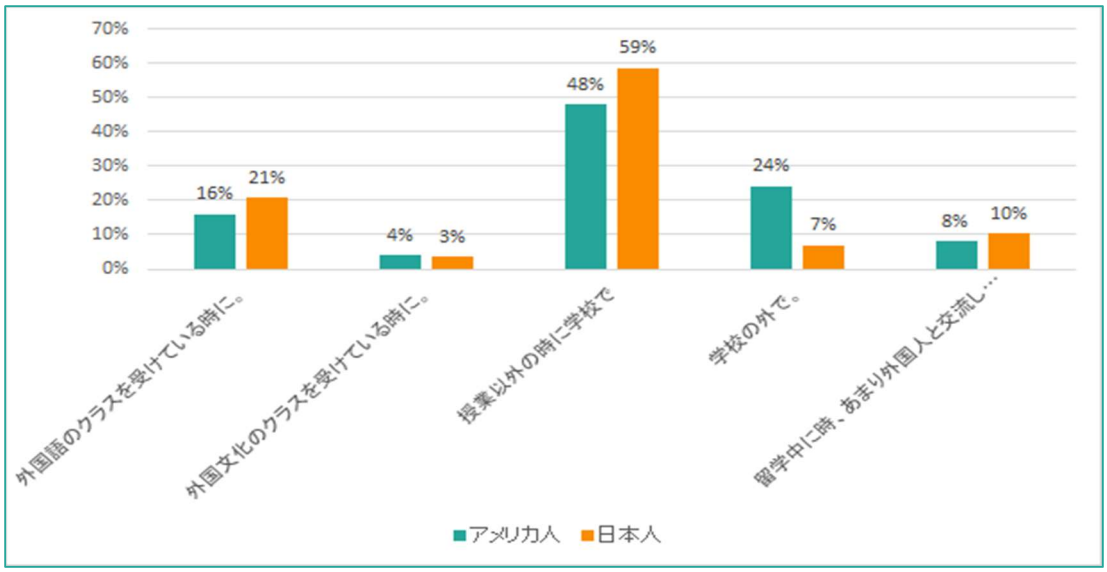


図 2: 母国の大学のどこで留学生と一番多く交流したか

母国で授業以外の時に大学のどこで一番多く交流したかという問には日本人とアメリカ人の大半が（図 2 参照）、学校のキャンパスで留学生と一番多く交流する機会があったと答えた。

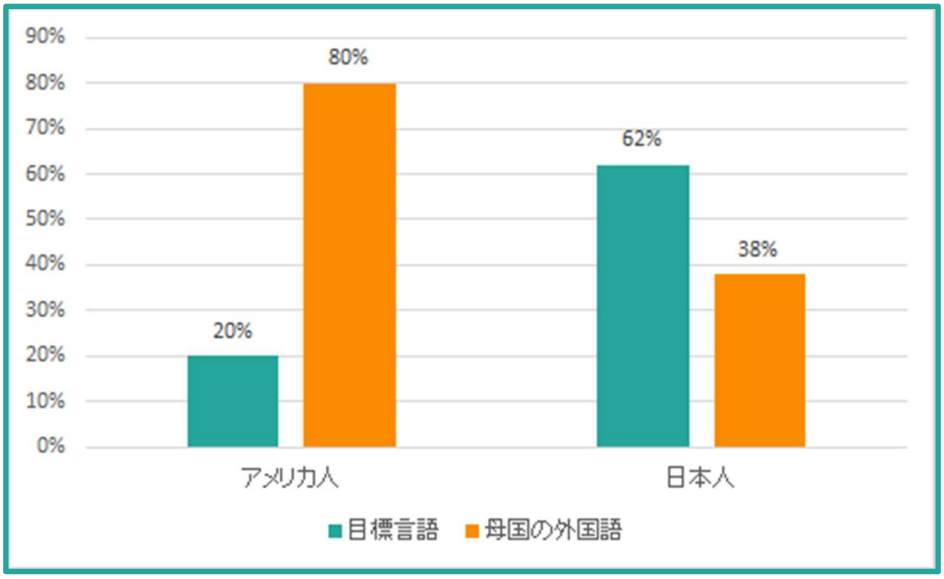


図 3:母国のキャンパスで留学生と交流する時（例： サークルやクラブ活動の時、食堂にいる時など）、どちらの言語をより多く使ったか

母国のキャンパスで留学生と交流する時、例えば、サークルやクラブ活動の時や食堂にいる時など、どちらの言語をより多く使ったかという質問には、 母国でアメリカの学生は英語を使うが、日本の学生は母国でも英語を使っていることがわかった (図 3 参照)。

5.2 研究質問 1 の結果のまとめ

アンケートの結果からわかった事は、留学先の外国語の授業の方が母国での外国語の授業より普段の生活で使える言語を習得するということである。また留学先では学生は授業以外でコミュニケーションをする機会が多いことがわかった。その上、留学先の外国語の授業は学生の言語への自信

や成長に大きく影響するようである。日本人の学生の場合は母国の大学でも英語を使う傾向があるようである。

5.3 研究質問二の結果

研究質問二は「外国語授業の中では習得できず、留学により習得できる異文化理解にはどのようなものがあるか」である。

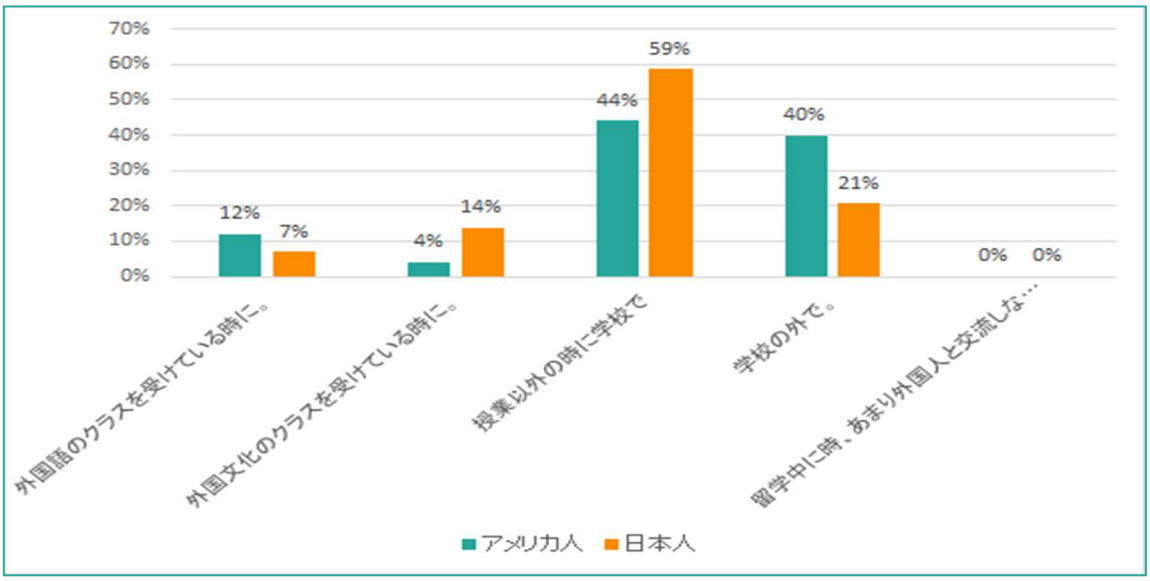


図 4:留学先の大学のどこでその国の人と一番多く交流したか

図 4 からわかるように留学先の大学のどこでその国の人と一番多く交流したかと言う質問に対し、日米の 学生は 授業以外の場、例えば、食堂等で交流した機会が多かったと答えている。

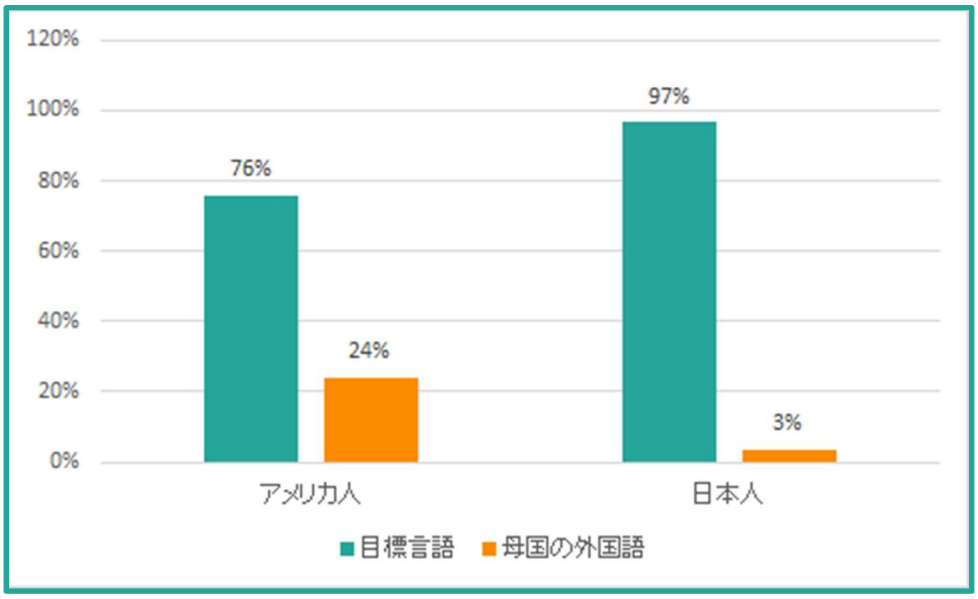


図 5:留学先のキャンパスでその国の人と交流する時（例： サークルやクラブ活動の時、食堂にいる時など）、どちらの言語をより多く使ったか

留学先のキャンパスで留学生と交流する時（例： サークルやクラブ活動の時、食堂にいる時など）、どちらの言語をより多く使ったかという質問に対しては、どちらの国の学生も滞在国の言語をより多く使ったようである (図 5 参照)。

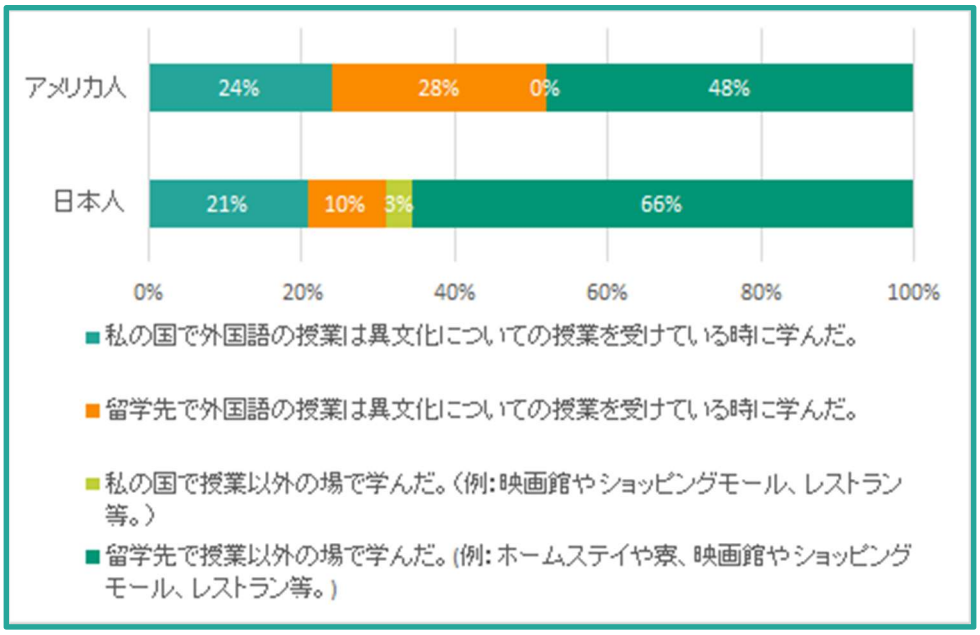
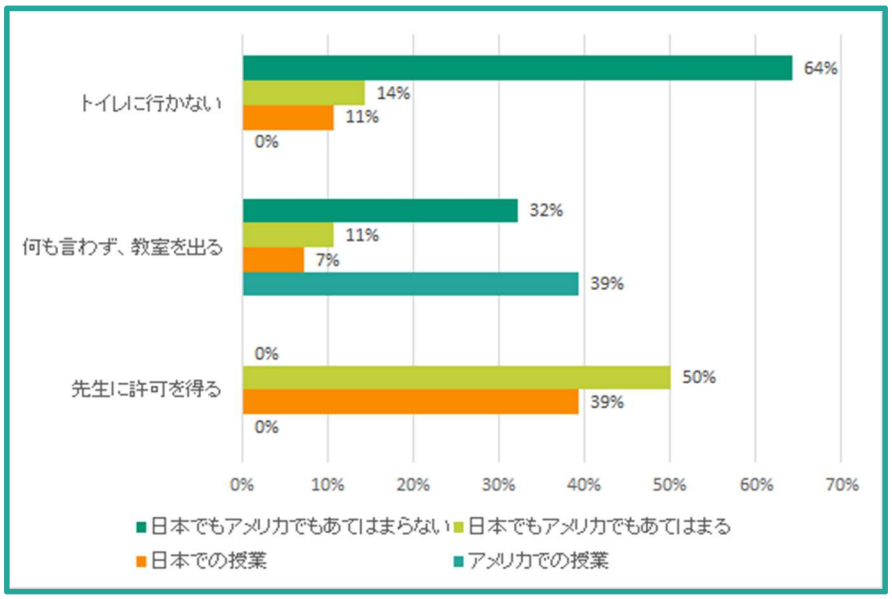
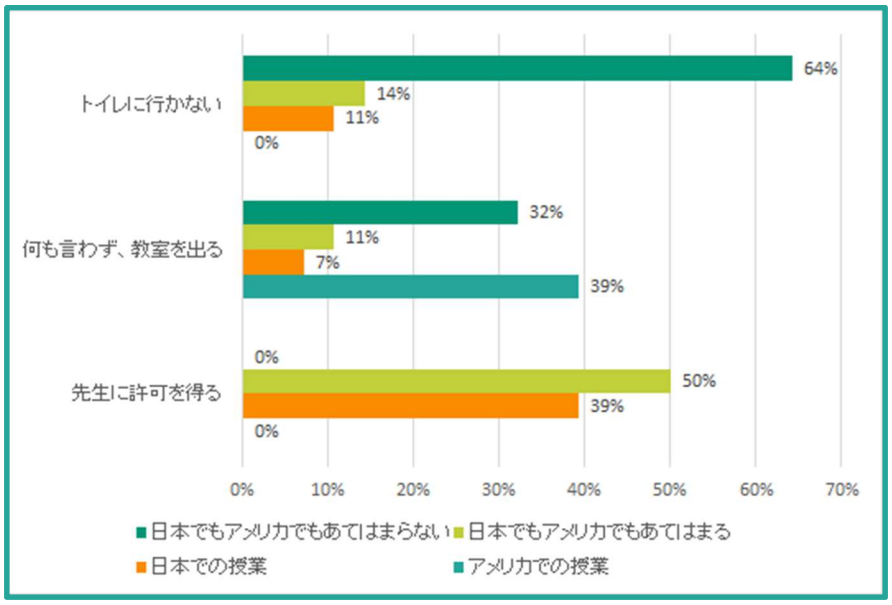


図 6:アメリカ文化や日本の文化におけるタブーを学んだところ

アメリカや日本の文化におけるタブーは留学先の授業以外の場で学ぶことが多いことがわかった。例えば、ホームステイ、寮、映画館、ショッピングモールやレストラン等が挙げられた。





外国語の授業を受けている最中、トイレに行きたくなってしまった時

図 7.1(上):日本人

図 7.2(下):アメリカ人

次に外国語の授業を受けている最中、トイレに行きたくなった時どのように行動するか聞いてみた。その結果、日本にいるアメリカ人の 89% **(図 7.2 参照)**とアメリカにいる日本人の 59% **(図 7.1 参照)**は先生にトイレに行く時、許可を得るという結果が出た。このことからも留学生はその国の文化にあった行動をしていることがわかった。

5.4 研究質問 2 のまとめ

どちらの国の学生も留学先の文化にあった振る舞いを学ぶため、留学することによって異文化への理解力が深まり、外国語に自信を持つようになることが分かった。また、その国の文化は授業で学ぶよりクラス以外で学ぶ機会が多いようである。日本に留学したアメリカ人の日本語のクラスでは先生以外は外国人であるため、日本人との対人コミュニケーションは少ないこともわかった。また、異文化交流

においてアメリカの学生は日本ではあまり日本語を使わない傾向があるのに対し、日本人の学生はアメリカでより英語を使う傾向にあることもわかった。

5.5 研究質問三の結果

研究質問三は「どのような文化的偏見が適切なコミュニケーションに影響を与えるか」である。

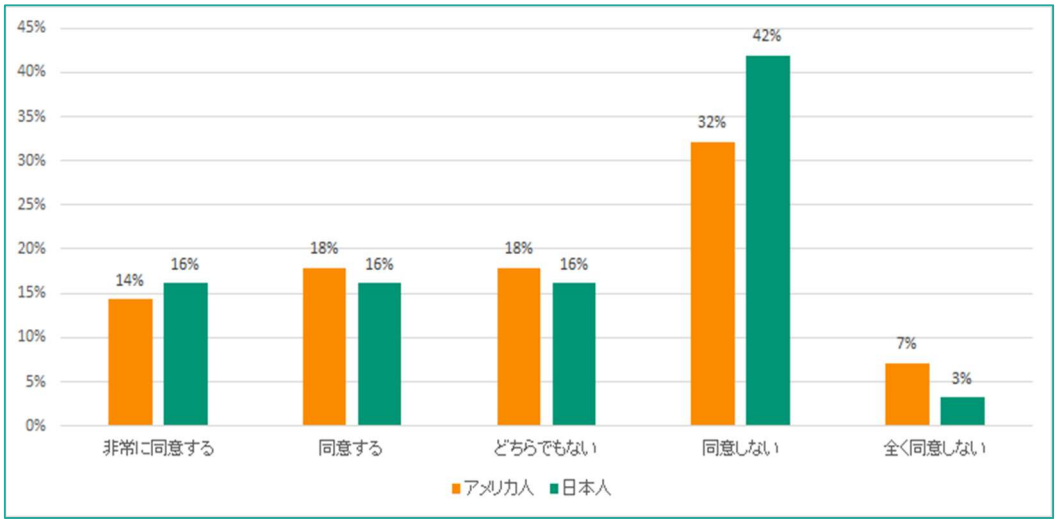


図 8:『デリケートな話題において、新しい語彙・文法を使い、間違えても気にしない傾向がある。』

では、デリケートな話題において、新しい語彙・文法を使い、間違えても気にしない傾向があるかについてどの程度同意するか質問した。図 8 からわかるように、日本人もアメリカ人もデリケートな話題で語彙や文法を間違えるのは良くないと思っていることがわかった。これはホーフステッドの研究の結果と異なった。つまりアメリカ人も、日本人と同じように滞在国の人と話す時に、デリケートな話題で語彙や文法を間違えてはいけないと考えていることがわかった。

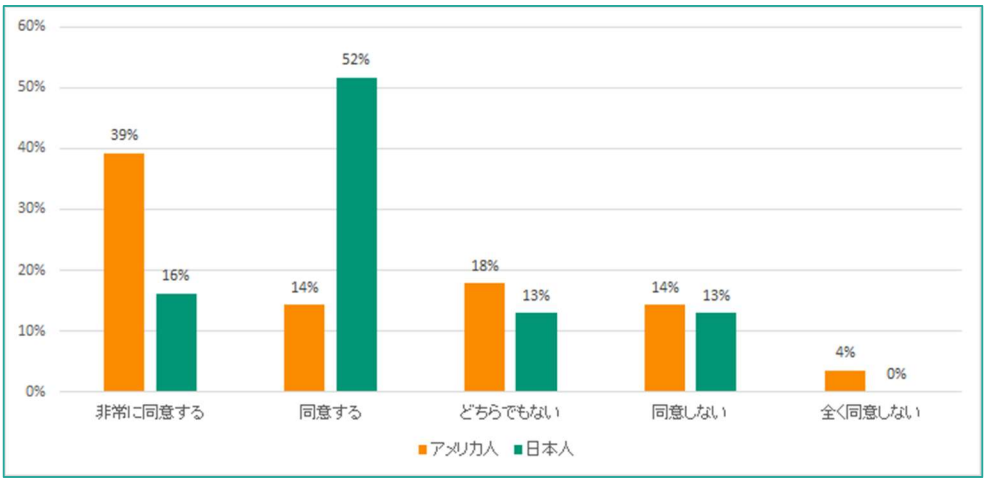


図 9:「デリケートな話題において、語彙・文法を間違わないように使う傾向がある。』

ここで、確認のために「デリケートな話題において、語彙・文法を間違わないように使う傾向があるかについてどの程度同意するか」と聞いた結果、前の結果を裏付ける同じ結果が出た。つまり日本人は慎重に行動するというホフテッドの結果の逆で、図 9 からわかるように、アメリカ人の方が異文化に於いてはその国の文化を尊重し行動することが大事だと思っていることがわかった。

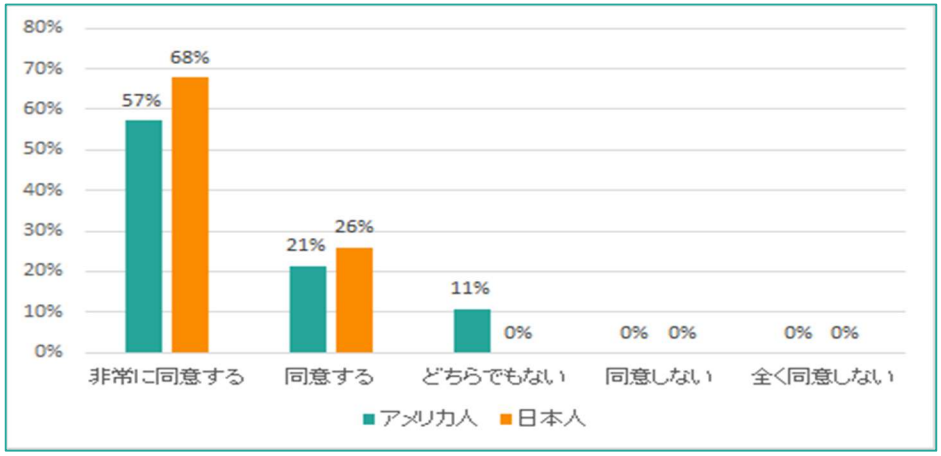


図 10:『違う文化の人と話す時に友好的、または協力的な関係を築くことが大切だ。』

違う文化の人と話す時に友好的、または協力的な関係を築くことが大切であるかについては日本人もアメリカ人も違う文化の人と話す時にできるだけ相手とつりあった会話をすることが大切だと回答している **(図 10 参照)**。

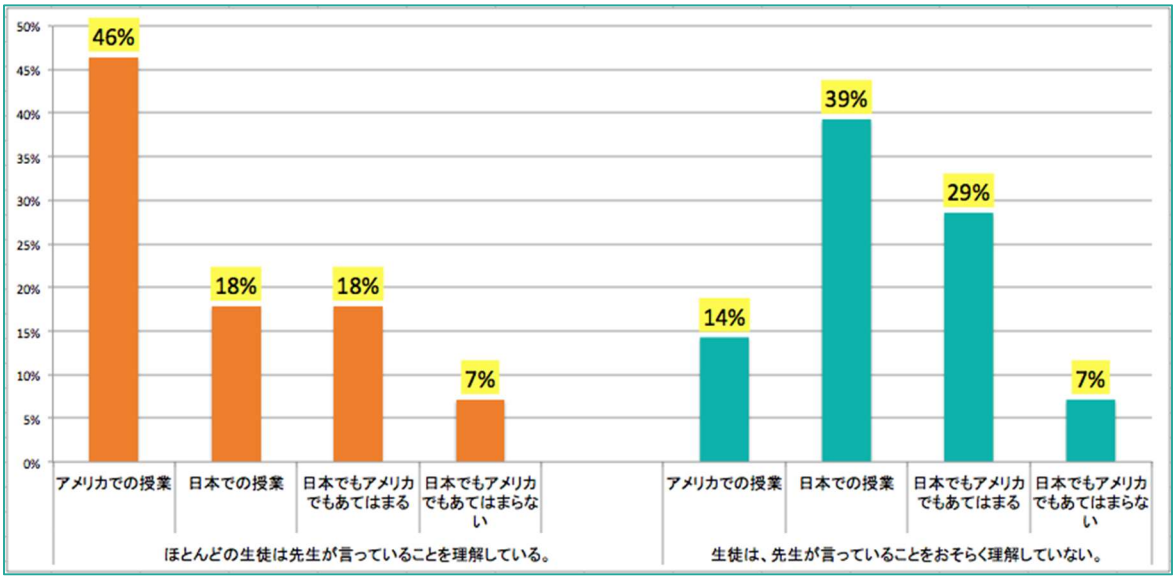


図 11:「外国語の授業で先生が説明している際、多くの生徒がニコニコしたり、うなずいたりしている。」

アメリカ人の回答

外国語の授業で先生が説明している際、多くの生徒がニコニコしたり、うなずいたりしている場合、アメリカでは先生が言っていることを生徒は理解していると判断する一方、日本では理解しているとはかぎらないことがわかった **(図 11 参照)**。

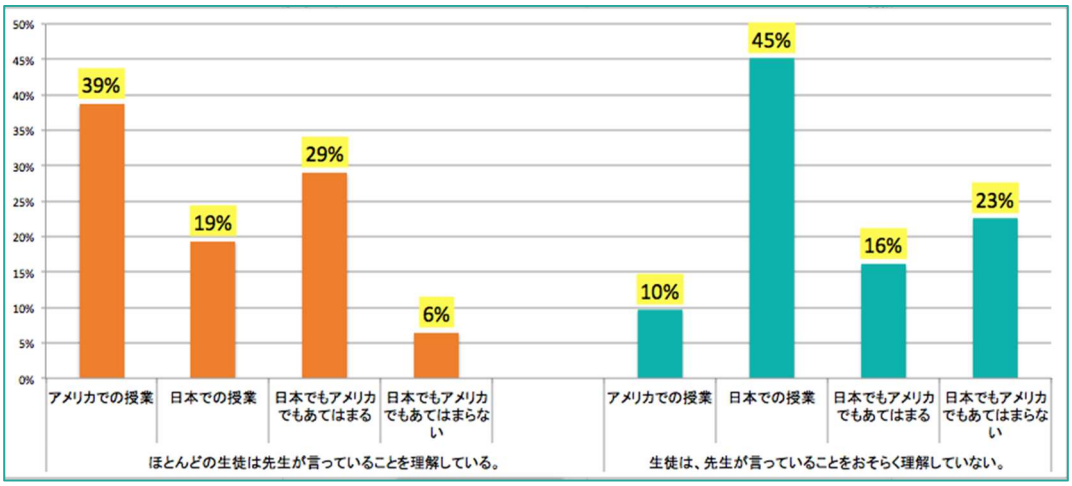


図 12:「外国語の授業で先生が説明している際、多くの生徒がニコニコしたり、うなずいたりしている。」

日本人の回答

日本人の場合もアメリカ人がアメリカの授業で学生が頷くのは授業を理解しているという意味だと理解するが、日本では必ずしも理解しているとはかぎらないと回答した **(図 12 参照)**。

5.6 研究質問 3 の結果のまとめ

この研究質問 3 では日米の学生ともホーフステッドが述べたような、文化的偏見が適切なコミュニケーションに影響を与えることはなかった。また、日米学生とも言語習得においてリスクを冒さない傾向にある。そのため文化的偏見はあまり起こらない。一方で、アメリカ人の学生はあまり外国語を使いたがらない傾向がある。それに対し、異文化交流において日本人は友好的または協力的でいたいという傾向があることがわかり、ホーフステッドの文化的偏見が当てはまると言える。

6. 研究の結論

母国での外国語の授業では目標言語だけで学ぶ機会が少なく、その国での適切なふるまいや、デリケートな話題を学ぶことは難しいようである。また、留学先の外国語のクラスを受講することに

より、言語能力に自信を持てるようになる。それは目標言語の国での授業内では異文化交流やデリケートな話題について話す機会があるからである。しかし授業内で、その国の学生と交流することはあまりないことがわかった。留学先で日本人の学生は話すことに自信がない場合、より多くの話す機会を持とうとする。その一方で、アメリカの学生は話すことに自信がない場合、あまり話そうとしない傾向があるようである 。状況に於いて使われるコミュニケーションのスタイルに違いはなかった。この研究で気づいたことは母国での外国語の授業では対人関係、異文化コミュニケーショについての内容が欠けているのでもっと言語学習者が外国語話者と交流する機会があるべきだということである。

7. 研究の限界点

この研究の限界点はアメリカ人の学生の言語学習期間が日本人より短いため、そのことが言語への自信の低さに影響を考えたかもれない **(図 13 参照)**。また、回答者がアメリカで英語を学習している日本の学生と学生に留学したアメリカ人だけなので結果一般化することはできない。

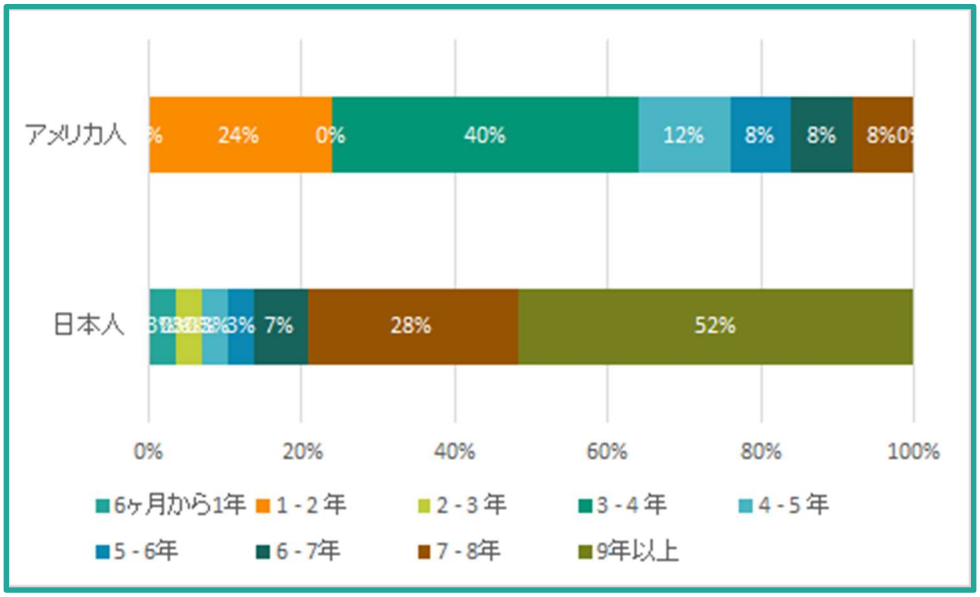


図 13:外国語の学習経験

さらにホフステッドとラムジーの研究を基にしたが、他の研究理論も学び再調査する必要性があると思った。将来、日本とアメリカに加えて、もっと多くの国の文化を含めた幅広い調査をしたいと思う。

参考の文献

American Council on The Teaching of Foreign Languages. (n.d.). About the American Council on the Teaching of Foreign Languages. Retrieved December 2, 2015, from http://www.actfl.org/about-the-american-council-the-teaching-foreign-languages

An Introduction to the Intercultural Development Inventory (3.28 minutes) | Intercultural Development Inventory. (n.d.). Retrieved October 21, 2015, from https://idiinventory.com/video/an-introduction-to-the-intercultural-development-inventory-3-28-minutes/?id=357

Clauss-Ehlers, C. (2006). *Diversity training for classroom teaching* : A manual for students and educators. New York ; Berlin: Springer.

Education and the Language Gap: Secretary Arne Duncan's Remarks at the Foreign Language Summit | U.S. Department of Education. (n.d.). Retrieved December 2, 2015, from http://www.ed.gov/news/speeches/education-and-language-gap-secretary -arne-duncans-remarks-foreign-language-summit

Global constructions of multicultural education: Theories and realities. (2001). Mahwah, N.J.: L. Erlbaum Associates.

Grant, C. A., & Lei, J. L. (2001). Global Constructions of Multicultural Education : Theories and Realities. Mahwah, N.J.: Routledge. Retrieved from http://search.ebscohost.com/login.aspx?direct=true&db=nlebk&AN=63037&site=ehost-live

Hanzawa, Chiemi. *Listening behaviors in Japanese*: Aizuchi and head nod use by native speakers and second language learners. PhD (Doctor of Philosophy) thesis, University of Iowa, 2012. http://ir.uiowa.edu/etd/3463

Hammer, M. , Bennett, M. , & Wiseman, R. (2003). Measuring intercultural sensitivity: The intercultural development inventory. International Journal of Intercultural Relations, 27(4), 421-443.

Hidden curriculum (2014, August 26). In S. Abbott (Ed.), The glossary of education reform. Retrieved from http://edglossary.org/hidden-curriculum Horie, M. (2000). Intercultural Education for Development through Intercultural Experience:Theories for Practice. The Bulletin of the Center for International Education,Nanzan University, 1, 31–46.

Interpersonal Communication. (2011) (2 edition). New York: McGraw-Hill Education.

International Perspectives on Education. (2007). [Bronx, NY]: H.W. Wilson Co.

Koteková, D. (2013). Confidence in the Fundamental Role in Learning a Foreign Language. Journal on Efficiency and Responsibility in Education and Science, 6(2), 84–104. http://doi.org/10.7160/eriesj.2013.060203

Klopf, D. (1991). Japanese communication practices: Recent comparative research. *Communication Quarterly*, *39*(2), 130-143.

Kruse, J. , Didion, J. , & Perzynski, K. (2014). Utilizing the intercultural development inventory® to develop intercultural competence. *SpringerPlus*, *3*(1), 1-8.

Lauridsen, K. (2010). The multilingual and multicultural classroom. *European Journal of Language Policy*, *2*(1), 142.

Matsumura, A. (1995). Daijisen. Tōkyō: Shōgakkan.

Midooka, K. (1990). Characteristics of japanese-style communication. *Media, Culture & Society*, *12*(4), 477-489.

Mitchell, B. , & Salsbury, R. (2000). Multicultural Education in the U.S. : A Guide to Policies and Programs in the 50 States. Westport, Conn.: Greenwood Press.

Ramaraju, S. (2012). Psychological perspectives on interpersonal communication. *Researchers*

World, *3*(4), 68.
Ramsey, S. Interactions between North Americans and Japanese: Considerations of Communication Slyle. (n.d.). Retrieved October 21, 2015, from http://homes.lmc.gatech.edu/~herrington/classes/4406f2000/ramsey.html
Ramsey, S. (1979). Nonverbal behavior: An intercultural perspective. *Handbook of Intercultural Communication*, 105-143.
Rethinking Multicultural Education : Case Studies in Cultural Transition. (2002). Westport, Conn.: Bergin & Garvey.
Schnickel, J., Martin, R., & Maruyama, Y. (2010). Perspectives on Studying Abroad : Motivations and Challenges. Language, Culture, and Communication : Journal of the College of Intercultural Communication, 2, 103–120. http://doi.org/10.14992/00005748